

最初に「路上のふた」を意識してみたのは、1994年春、東京で2度目の学生を始めた時だ。

「路上観察学入門」や、「超芸術トマソン」などを読み、街には普段見過ごしているけれども注目すると面白いモノや見方がある、と知った頃で、その中に、「マンホールの蓋についてのトピック」もあった。

確かに街によって模様が違うな、と東京のふたを眺めつつ、それらの書籍の情報は東京にあるものが主だったので、例えば、東京大学の中にある「前方後円墳型マンホールふた」など、訪れたおり、「ついでに」写真など撮っていた。(今や東大のふた巡りは、人気スポットになっていたりする)

話は前後するが、直前まで公共物のデザイナーをしていて、街のパーツを観察せざるを得なかった。

元々街歩きは好きだったから、これはこれで楽しかったけど。

辞めてからもそんなことをする必要はないんだけど、いったん見えるようになったものはどうにもならなくて、更に、本で読んだ「ニッチなモノの捉えかた」に応用してみると、実にすんなりと、「たくさんのモノ」が見えるようになっていった。しかも、教科書の舞台、東京を歩くのである。面白くないはずがない。

最も、路上のふたは、街にある様々な「ニッチなもの」の中のひとつ程度の認識だったから、時々、特徴のあるふたの写真撮る程度で、路上のふたを全て意識するようになるのはまだ後になる。それ以前は全くそんなことをしていないのだから、「ふた暦は？」と聞かれたら、1994年頃からかなあ、と答えることにしている。

急に開眼した、などと言えれば分かりやすくてカッコいいのだけれど、自分の場合、街の風景をジワジワと深読みしていくうちに、路上のふたをしっかりと見るようになったのではないか、と思っている。



さて、1996年、どこかは広島に移る。
ある日、マンホールと目があった。
なにやら模様とマークが入っている…
No. 142
そういえば、広島市の市章である。小学校の時習った記憶がある。

唖然とした。何に唖然としたかと言うと、今までさんざん旅をしてきたのに、訪れた地のフタの記憶が全くない。
見ているようで見ていないのだなあ、と、つくづく思った。
眺めていることと認識していることは別問題なのだろう。

じゃ、となりの呉市って、どんな模様なんだろう。

いくら想像しても分からない。

ネットで調べてみては？、というのは現代の発想で、時代を考えたら、
江戸時代に電車の乗ろう、と思うようなもので、そんなものは無かったのだ。

呉に行ってみた。

広島市と模様が違う。

中央のマークは市章であろうと推測できるが、意味が分からない。

(最近、呉の子どもは習いますよ、と聞いた)

市役所と図書館で調べてみた。

「呉には、周囲に、ここのつの山があって、9個のギザギザは、それを表しているのです」

更に、中央の下の文字は、本来、市、なのだが、

下水道のフタだけ、下という文字にアレンジしてあるのだと教えてくれた。

へえ！なるほどねえ。こんなことで感動するとは思わなかった。

情報が少ない、というのは、いいこともあるのだ。

このくだりは、今でも鮮明に覚えている。

ここのつの山の名前は忘れたけど。

次に、三原に行ってみた。

な、なんですか？これ。模様が異様である。
変なところで分割してあるし、四角いし。
困った時の市役所である。

「カタカナのミハラ、を図案化したものですよ」

あ！

言われてみれば、確かにそうだ。

意外と単純なのね。

難解そうなトンチの答えが超易しかった時のようなだまされ感。

けど、笑ってしまった。

どうしてこんな分割なのかは、結局その時は、分からなかった。



福山に飛ぶ。

ここまでで結構学習したけど、分からないぞ。これ。

答えは、こうもり。

？

かつて、福山城界隈は、こうもり山と呼ばれていたそうなのね。

こうもりが飛んでいるのか。そういうことなのね。

このあたりで、なんとなくフタの世界が分かったような気がしてきたが、
今にして思うと、この頃は、市章集めが楽しただけだ。

フタを探するというのは、面白い行為だと思った。

何が面白いかというと、現地に行ってみないとどんなフタがあるか分からないのだから。



そんなある日（1996年か1997年ごろ）広島市内でこんなフタを見つけてしまう。

直径10センチほどのふたで、
上水道の栓を操作するためのもの。
文字の向きと磨耗具合からいかにも古そうで、
戦前モノかも？と思った。

広島市内中心部で戦前モノというのは
特別な意味をもつ。

HWW、などと見たこともない記号が入っている。

（現行品には入っていないのだ）

しかも、このふた、他にもあるかな、と探してみたが、全くみつからないではないか！

繰り返すが、ネット情報のない時代である。何も分からない。

（最も、今に至るまで、このふたのことをネットで取り上げているのは自分以外見たことがないが）

更に、こんなふたを見つけてしまう。
直径60センチほど。下水道のマンホールのふたである。

古そうで、これも戦前ものかもしれない、と思った。
これも、仲間は全然見つからないのだ。

餅は餅屋、フタはフタ屋で、上下水道局に行って、これらの写真を見せて
聞いてみた。

「一切分かりませんね」

なんで管理者が分からないの！とは口に出して言わなかったけれど、
そんなことってあるのか、と思った。

なんでも、フタの位置と磨耗状況などは管理しているが、模様はどうでもよく、資料もない、
ついでに言えば、興味もない、と。

原爆で焼けてしまい、資料もないのだそうだ。

もう、お手上げである。



さて、これらのフタが路上に何枚生き残っているのか。

これ以外にもいろんなフタがあるに違いないし、何か分かるかもしれない。

紙の資料がないのなら、路上のフタに聞いてみるしかない。

ことは簡単。全ての道路を歩き、全てのフタを見る。

誰から頼まれたわけでもないけれど、せっかく調べるのならと、

広島市のデルタ部分の全てのフタの調査分類を行うことにした。

上下水道、電気、ガス、その他、路上にあるふた全てを。

狭いようで広い広島デルタ。結果は、……。

ずっと広島市のフタばかり見ていると飽きてくるので、時折遠征を行っていた。

1998年頃だ。

同時進行で、広島県内一部島嶼部を除く、ほぼ全市町村を巡った。
平成の大合併の前で、確か86市町村くらいあったはずだ。

当時は、広島県内にデザインマンホールは少なく、あったとしても情報もなく、普通のふた探しがメインだったが、訳の分からないふた、つまり「謎フタ」がいくらかでもあり、退屈しなかった。

そんなある日、宮島に向かった。
特に確証はないが、天下の名勝である。なにか特別なものがあるに違いないと思った。
この日の朝の、電車でガタゴト揺られながらの現地に着くまでのわくわく感は今でも覚えている。

まずは神社を目指して歩いていると、なんと、神社の名前入りのフタが！
さすが宮島。（この写真と、指差しているのは後日撮影のもの）

以来、神社に行くときは足元にも注意しているが、神社名の入ったふたには出会っていない。
明治神宮や出雲大社、大宰府天満宮などにも、（探した範囲では）社名入りふたはなかった。

ところで、特別なものには特別返して、拓本を採った。紙、と言ってもコピー紙だったけど、
ふたの上ののせて、鉛筆でこすりとり。

家を出る直前、何かレアなものがあったらと閃いて、道具をかばんに忍ばせたおいたのだ。
コインの模様を鉛筆で浮きださせるのと同じで、たいした手間ではない。

今より観光客は少なかったし、迷惑にもならなかった。よく鹿に襲われなかったな、とは思うけど。

それからは、よその街でふた観察の機会があれば、そこで1枚拓本をすることにした。

更に、面白い、価値がある（と、自分が思うもの）は、もう1枚と、どんどん増えていった。

よく、アートですね、なんて感想を聞くし、実際そう見えるんだけど、やっている時と、あとで眺めている時の気分は、いい記念品。つまり、お土産である。

自分がそこに行って、なにかをやって行ってきた証、とでも言おうか。
なので、今回のこの展示、お土産品の展示会、でもあるのだ。

このころ、フタの世界、というのがなんとなく分かってきていて
少々「飽き」もきていたのだが、ふたの拓本をとるという行為によって、
新鮮味を復活させてくれてれたと言える。

この、ふたの拓本第1号、現在、行方不明。

捨ててはいないはずなんだけど。

こんなところに。参拝路出口も含めて、同じものが何枚もある。
数年前行った時は、土に埋もれて、知っていないと見つけれなかった。



1999年。

所要があって、車で東京に向かった

この時、時間はたっぷりあった。

人から言わせれば、そういう発想に至るは尋常でない、フタの東海道 53 次に挑むことにした。

結果…

09



2002年には、フタの四国八十八カ所巡りを敢行。

10



まさしく修行であった。

広島市の下水道ふた

広島市に下水蓋が登場したのは、文献によると、明治末から大正始めごろ。



●路上に残る戦前の鉄蓋はこの4種。

地味なふたで、見逃しそうになるけれども、車で言えば、クラシックカーということになる。最も、これ以外にも種類があった可能性もあるが、なにせ、紙の資料もなければ、現物もない。市章ではなく、意味不明の模様が入っていて、いまだに正体不明である。

●図書館で広島市の市史から見つけた数少ない図版によると、極初期の蓋は、このようなメッシュタイプであったらしい。路上の水を積極的に取り入れる機能を優先していたのだろう。

この上をヒール高い靴で無造作に歩くとどうなるかは想像してしかるべしで、それだけが理由ではないにせよ、いろいろと不都合があったらしく、やがてモデルチェンジをすることになる。路上には残っていなかった。これは、似ているからという理由で撮影したもので、近年のものだろうと思うのだが、いまだに、もしかして…との疑念も持ったりするけど、大正時代のふたがこんないい状態で残るとも考えにくかったり…。



●これが現在、もっともよく見かけるタイプ。実は、元々は東京用の図案を転用したもの。

広島市章は、明治 29 年に制定。周囲との合併など、いろんな理由で市章が変遷したりすることも多いが、広島市

は最初からこれ。その分、旧市章が見つかったりのバリエーション探しの楽しみはないし、市章から年代を判別するワザも使えない。



●これが東京都の蓋。



この図案の中央のマークの部分だけを変えて、広島市用にしたのだ。
このデザイン、広島だけでなく全国に広まり、いまや後追いで JIS 規格になっている。
なので、マンホーラーの間では、「JIS 規格の蓋」と言えば、写真を見せなくても通用する。

近年は以下のふたに積極的に交換されているらしく、上記 JIS ふたを見つけるのが困難になってきている。
東京でマボロシの柄になる日も遠くないような気がする。



●このような模様を、名古屋市型と呼ぶ。当然名古屋にはいっぱいある。写真は京都のもの。
この柄、広島市には1枚もない。



●ついでに、これは博多でよくみかけるタイプで、広島市でも何枚か見つけたけど、歩道や港で、マークの部分が無地だったから、私有地のふたであろう。



その他、広島市で見かける下水蓋たち。

これ以外にも極少量、違う模様があるが、バリエーションは以外と少ない。



23



広島市のデザインマンホールたち

広島市のデザインマンホール蓋は、局所的にはあったがあくまでもメモリアル的なもので、まとまった数の設置が始まったのは、2010年頃から。

範囲を限定して、それぞれ違うデザイン蓋を設置する手法を取っている。(今の所、広島市内全てには広がっていない)

●カープ坊や

ご存知カープのキャラクター。優しそうな顔なのに力強さを感じる、不思議なデザイン。

広島駅南口から、球場にかけての区域に数百枚あり、全てカラー、という訳ではない。

最初に写真を撮ったのは2010年1月17日だから、その頃設置が始まったか？

事前情報は知らず、初めて見た時、カープ坊やがこんな所におる！とビックリしたのを覚えている。

2017年秋にはV7バージョンも登場。球場のそばに1枚だけ設置してあり、発見者第1号は自分のはずだ。

線が太くパンチのあるデザインで、傑作の部類に入るだろう。マンホールファンからも、カープファンからも人気のふたで、グッズとの親和性も高いらしく、マンホールグッズを多数販売する会社の方に聞いたところ、実によく売れているそうだ。そのせいか、いまだに新商品がどんどん出るから油断がならない。

みんながハッピーになるマンホールふただ。



●折り鶴

広島駅の南北に多数ある。カープ坊やのふたと設置範囲が接しているのので、広島駅前を探検すると、このふたも見つかりオトクである。正直に言うと、色なしだと、何だかよく分からないが、これ、なんじゃろうか？と、立ち止まらせる効果はある（かもしれない）。

駅のそばという場所柄、外国人観光客が撮影している姿もよく見る（ような気がする）。2011年頃から登場か。



●紅葉

中区の幟町から広島城周辺にかけての地域にある。

広島から連想する（広島人ならなるほどと思う）鯉と紅葉をあしらったもの。

因みに、県の木はモミジ、市の木はクスノキ、

県の花はモミジ、市の花はキョウチクトウ。

どうでもいいかもだけど、広島の場合、県の木と花は同じなのだ。

2011年、3月9日、偶然にも設置の場面に遭遇。これはその仕上げの様子。

幟町の名所4本イチョウ下のふたは、秋にだけ、黄色い葉が仲間入りの季節感のある写真が撮れる。



●かもめ

宇品地区のみで、主に表通りの歩道に設置してある。カモメと波のだまし絵のようで面白い。

2011年4月10日撮影。ふたの周りのアスファルトの状態からみて、設置してからそんなに時間が経っていないときに遭遇したようだ。



●かよこバス 横川駅周辺にある

2012年2月4日、設置式が行われた。

「万宝留」とはしゃれている。



●「うすい」の文字の左に小さく記して

あるのは、広島県のマーク。

県の施設蓋のようだ。

広島市のマリーナホップの敷地に何枚かあった。

ヨットがプカプカで動きのある絵柄だ。

その向こうには、安芸の子富士、

似の島が描かれている。

今のところ、カラーは見たことがない。

ふたファンでもこれを知らない人は多いようだ。

県の港湾施設を探せば、他の場所にもあるかもしれない。



上水道ふた各種

明治時代、軍都機能の必要性により当初国から、市のおカネで上水道やりなさいと通達が来たものの、市議会で否決して、(深読みすると、市ではどうも事業化できない予算で嫌がったのか、などとも推測できる) その後に国費で事業が始まった経緯がある。当初は陸軍主導ともされるが、陸軍ふた、は路上には残っていない。

●量水器蓋。

メーターボックスとも呼ばれていて、中には水道メーターが入っており、検針員は蓋を開けて検針する。広島市の場合、上水道自体は戦前からあったが、メーターの設置が始まったのは昭和30年頃からと言われている。

当時はメーター自体が貴重品で、盗難がたびたび発生したとか。今では考えられない。

当初は、散水栓のものを流用していて、後のものより幅が狭い。幅狭型を見かけたら初期型と思ってよい。

数も少なかったのか、探して滅多に見つかるものではなく、レアな蓋である。

市のマーク入り撒水栓自体、1枚しか見つけていないから、こっちの方がレア度は高いともいえる。



そして、その後、よく見かける幅広タイプになった。市章部分には、メーカーごとに形の个体差があって面白い。中には、メーターと、水を止める栓が設置してあって、それで幅広になったのかもしれない。

市章の上がアーチ状のカーブを描くが、こんなデザインを採用しているのは広島市とその周辺だけで、全国的にも珍しい。(呉では採用していない)

同デザインで鉄筋コンクリート製のものを何枚か見つけた。よく見ると市章が入っているのだ。

1998年ごろ、江波の市営アパート前で、検針員の女性が開けているのを見たことがあり、ちゃんとメーターが入っていた。「重くて大変なのよ」と言っていた。そりゃそうだろう。試しに持ちあげたら筋トレに使えるような重量感。市内全域で10枚も無かったと思うが、今でも現役の蓋があるのかは分からない。

ふたは全て鉄製だとばかりと思っていたから、驚いた一品。



●消火栓は、近年丸いタイプが出てきたりしているが、実質1グレード。

こんなに消火栓のバリエーションが少ない都市も珍しい。

デザインには大してトピックもないが、トンボの胴体のように見える縦線が4本タイプと6本タイプがあり、4本タイプが極少量しか見つからないのと、痛み具合から、初期型か、一時期のメーカー違いかと推測される。

昔は、消火栓の型によって、中の消防ホース差込口の規格が違い、消防車の出動時に複数の差込口を用意する必要が嫌われ、積極的に統一が図られたらしく、少数派は駆逐されていったようだ。

旧字体の蓋、私が見つけたものではなく、横浜市の水道資料館を訪ねた時に、全国を歩いているという職員さんが撮影していた写真を譲ってもらったもので、段原の再開発地域で見つけたとのこと。自分の調査時には同じものは1枚も見つからなかった。

因みに、消火栓下部の開ける時に使う隙間には発泡スチロールが詰め込まれており、小石などが挟まって困らないように配慮されている。定期的の確認とメンテナンスを行っているのだろう。これが取れたりしているのは滅多にみない。以前、テレビのロケでこのふたを紹介した時、カメラマンが、何か詰まっているのだと思って（無理もないけど）ほじくり出そうとしたので、理由を教えて慌てて止めたことがある。

こういう配慮、よその都市では見た記憶がない。



HWW と書かれた止水栓。

HIROSHIMA WATER WORKS 広島市水道の略で、戦前まで使用していた表記。

なぜか戦後はやめてしまったようだ。

横浜市、新潟市では今でもこの表記の蓋が見られる。

水道台帳で確認したところ、ほとんどが昭和一ケタの設置だった。

1998 年ごろには路上に計 100 枚くらいが見つかったが、そのほとんどが段原再開発地域にあったため運命を共にし、今では路上で現役なのは 10 数枚と推測される。

右の蓋、広島市のマークに似ているが、なんと、海軍マーク！（らしい）

自分の調査時、広島市内でたった 2 枚しか見つからず、その 2 枚も今では路上から姿を消している。



右側が戦後タイプで、調査時の 1998 年ごろは、この蓋がほとんどだったが、近年、左の蓋に積極的に交換されており、蓋も見つけるのが難しくなっている。交換蓋は、差込式。



お気に入り、上の、海軍マーク蓋と
右のおかしなデザインの蓋です。

用途は長くなるのでここでは割愛。



36

地味なくせに一番価値があるのがこの蓋である。

ランプホール、燈孔蓋、などと呼ばれ、希少価値もあって、鉄蓋好きの間では、文化財級の認識になっており、蓋の追っかけで、この蓋に出会うことは、最も素晴らしいこととされている。

都市によってデザインも違うので、必ずこの形をしている訳ではないが、通は雰囲気で見分けるのである。

広島市で、現状6枚くらいが残っているが、どこの街でも見つかるかという、まず無いと思ってい。

37



38

39

40



マンホール

ランプホール

マンホール

